

同盟の力学

—ハノイ，北京，モスクワ，1964年～1980年—

猪口 孝

1. 序 論

1964年から1980年までの間，ユーラシア大陸の東端の3ヶ国，ベトナム，中国，ソ連の国際関係はめまぐるしい変化を示した。⁽¹⁾1945年からの3国関係をみると，同盟国から敵対国への変化が突然起っているかのように見える。1965年から1973年まで米国は南ベトナム政府軍を援助して，ベトナム共産主義者に軍事的に大量攻撃を加えた。米国の軍事行動をきっかけとして，1960年代初めから公然となった中ソ紛争も1965年から1966年にかけての非常に短い間，一時的に部分的和解への動きがみられた。しかし，1966年に入ってまもなく，国内の政治抗争によって中国はほとんどすべての国との関係を悪化させた。1968年，ベトナム共産主義者のテト（旧正月）攻勢は軍事的には大失敗に終わったが，米国の戦闘意志を挫いた点で，政治的には大成功であった。米国はこれ以後，軍事圧力を拡大することによって和平条件をよくしようとする。1968年の夏のワルシャワ条約機構軍のチェコスロバキアへの軍事介入は，中越のその後の乖離を促した点で注目し値いする。ベトナムがソ連の行動を支持するのをみて，中国はソ連とベトナムによる中国包囲の悪夢的なシナリオをみたのである。1969年の2月から3月にかけて，中国とソ連は極東の国境で非常に限定された，小規模な武力衝突を2回繰り返した。1971年，中国は米国と和解の動きを具体化

した。1973年、第2次ベトナム戦争についてのパリ協定によって、米国軍はベトナムから撤退した。1975年、ベトナム共産主義者の南ベトナムの武力制覇は完成した。ほぼ期を同じくしたカンブチアとラオスの共産主義者による解放はインドシナ3国の伝統的な対立をより複雑なものにした。南ベトナムの急進的な社会主義化は大量の難民を生み出し、それが越中の対立を悪化させるもう一つの要因となっていた。1978年、越ソ友好同盟条約が結ばれた。同年、ベトナムはラオスと協約を結び、さらにタイを中立化させた上で、年末、ベトナムはカンブチアに進入した。1979年1月、中国は米国と外交関係を樹立し、1979年の2月から3月にかけて、中国はベトナムに進攻した。(さらに1982年、中国はソ連との実務的な関係の修復へと動いた。)

このような同盟関係のかなり大きな変化は歴史上まれではない。同盟関係はどのような力学をもっているのであろうか。これについてはさまざまなアプローチによる、少なからぬ研究が累積されている。この小論では、1964年から1980年までの越中ソ関係を題材にして、軍事力と友好度の2つの側面から、その力学をおさえたいと思う。軍事力の変化が友好度によって引き起されるとするモデルを一方で、他方では友好度の変化が軍事力の変化によって引き起されるとするモデルをつくる。前者は越中ソ米の4ヶ国の権力配置によって国家Aの友好度の表現の水準を説明しようとするものであり、後者は4ヶ国の認識の上の相互作用によって国家Aの軍事力の水準を説明しようとするものである。小論は猪口⁽²⁾(1981)の続きを成すものである。

2. 概念と指標

同盟、協調、提携、およびこれらの変化は2つの主要な要素をもつ。軍事力と認識である。軍事力はここでは将兵の数とが戦車の数のようなもので測定できるものをさすことにする。同盟や協調はお互いの中に、友好度の一定の収斂

があり、同盟や協調している国家の軍事力が共通の敵に対して調整ないし結合されている時に存在すると考えられる。

この小論は同盟や協調の2つの要素を分析的に別々に扱うことによってより深い理解が可能になるのではないかということを示そうとするものである。軍事力であれ、友好度であれ、引き金（トリッガー）変数とでもいえるものをとらえることによって、同盟や協調の変化を「予測」しやすくなるのではないかと思うわけである。このために、軍事力と友好度の指標がつけられる。便宜的に、軍事力は将兵の数、友好度は国家記念日の祝電に基づいた指標を使う。

2. 1. 軍事力

将兵の数は越中ソ3国の軍事力を示す重要な数字となる。第1に、3国はコーラシア大陸の東端に地理的に近接しており、国境に大量の陸軍を保持している。第2に、最近の経験からみて、3国間の紛争は陸上戦を戦闘の重要な形態としていることが明らかである。したがって、3国間の軍事技術水準からみた多大な相異にかかわらず、各国の将兵の数の水準とその変化は総体的な軍事力の水準とその変化をかなり忠実に反映しているとみて大きなまちがいはないと思われる。将兵の数はロンドンの国際戦略研究所から毎年出版されている「軍事バランス」⁽³⁾をみれば体系的に集められる。「軍事バランス」に明らかでないデータについては、公開の、しかし推測を含むデータをもとにして、最善の推定値を出した。

ここで注意しなければならないのは、私が興味をもっていることは絶対数ではなくて、3国の各一対の間の軍事力の差であることである。1人当りの軍事力水準があまりに大きい時、将兵の数をもって軍事力とすることに若干の問題がある。しかし、なんらかの重みを将兵の数にかけて軍事力とするための納得できる根拠がみつからないために、将兵の数の差を使うことにした。

2. 2. 友好度

比較可能な時系列データが必要なので、ここでは国家記念日にかわされる祝電のうち、各支配政党の機関紙に出版されたものを使うことにした。これらの祝電は次の5つの重要な特徴をもっている。

- (1) 祝電の交換はよりルーティーン化されている慣行である。
- (2) 祝電の長さは大体短い。
- (3) 高度に形式化されており、言葉は注意深く選ばれている。
- (4) 国内、国外の動向について、権威ある概念化を示している。
- (5) 友好敵対の観点から2国間の関係についての権威ある特徴づけを与えている。

このような特徴は祝電を3国間の友好度の、効率のよいデータ・ベースにする。いうまでもなく、これらの電報が一枚岩的に結合した支配集団の唯一の権威ある概念化と特徴づけを私が仮定していることを意味しない。このような資料が政治指導者による権威ある概念化と表現を調べる際に役立つ、よいデータ・ベースであることを仮定しているにすぎない。ここでは2国間関係を友好度から特徴づけたいのであり、このために、次の5点について、とくに調べることにした。

- (1) 祝電の中の文章の数、
- (2) 宛名が公式の肩書（たとえば、党委員長）だけではなく、個人名（たとえば、ホーチミン）を含むかどうか、
- (3) 祝電は「親愛な同志」とか「尊敬する同志」という句を含むかどうか、
- (4) 国家記念日の日付と祝電が党機関紙に掲載された日付との差、
- (5) 祝電が掲載された新聞の頁。

順に説明しよう。⁽⁴⁾

- (1) ここでの前提は、祝電の長さの近似としての文章の数が大であればあるほど、送り手は受け手に友好度を表現しているであろうということである。たとえば、1967年のモスクワにあてたベトナムの祝電は異常に長く、1968年のはじめに予定されていたテト（旧正月）攻勢にソ連からのより多くの軍事援助と政治支持を懇請したことを公けに示している。同様に、1977年のモスクワあてのベトナムの祝電は異常に長く、1975年前後のベトナム版「全方位外交」の計画とは反対に、国内では経済的災難、政治的困難、さして外交的失敗という絶望的な状況の中でソ連の外交的支持にやむなく頼らざるをえなかったことをおそらく示しているであろう。逆に、1979年の北京に対するベトナムの祝電は非常に短かく、文章が全然ない。同様に、中国は（1975年を除いて）1973年以後、ハノイに対する祝電を掲載していないし、（1977年を除いて）1973年以後、モスクワに対する祝電を掲載していない。ここで注意しなければならないのは、祝電の交換は掲載とは異なることである。1974年、中国はモスクワに祝電を送ってはいるが「人民日報」に掲載されていない。（しかし、北京放送でのことが報道されている。⁽⁵⁾）
- (2) ここでの前提は、個人名がついた祝電はより暖かく、より友好的であるということである。たとえば、1975年以前には、モスクワや北京に対する祝電では個人名をいれるのがベトナムの慣行であった。1968年だけは例外である。ベトナムが同年はじめのテト（旧正月）攻勢に対して否定ないし不快を示したのではないかと思われる中国とソ連に対する不満を示すものと考えてよいであろう。中国は都市を解放しようとするベトナムの「軍事冒険主義」を好まなかったし、1968年のテト攻勢後、南ベトナムに駐留し、戦闘を継続しようとする米国の意志が減退していることをみて、ベトナムの決定的な勝利はソ連の影響力を強めるのではないかと危懼していたのであろう。ソ連は1975年の少し前まで、ベトナム間

題の軍事解決を好まなかった。それまでは政治解決を好んだのである。又、ソ連は、ハノイに対する軍事援助増加の必然性について心配していたのであろう。大量の軍事援助が米国を我慢できないほど挑発することを恐れたのである。

- (3) ここでの前提は「親愛な」とか「尊敬する」という形容詞を使うかどうかが友好を表現しているということである。たとえば、ベトナムは北京に対して、祝電の中で、1965年から1966年、そして1974年以降、このような形容詞を祝電の中で使っていない。又、ベトナムはモスクワに対して、1974年、1975年、1976年、そして1979年に使っていない。1965年、1966年に北京に対してこのような言葉を使っていないことは、ベトナムとソ連の「反帝共同行動」の立場に反対の政策を中国が取ったことに対するベトナムの不満を示しているのであろう。同様に、中国が政治解決を明白に望んでいたこともベトナムの不満を強めた。モスクワに対して、1974年、1975年、1976年にこのような言葉を使っていないことは、大量の軍事援助の約束にもかかわらず、この重要な時期にソ連の支持の度合にかなり不満だったことをおそらく示しているであろう。1979年の場合は、ベトナムのカンプチア占領後、必ずしも十分ではないソ連の援助に対するベトナムの不満を示すものであろう。
- (4) ここでの前提は祝電がすぐ掲載されれば、そのことは受け手が送り手に与える政治的優先順位が高いことを意味するということである。多くの祝電は国家記念日のその日に掲載される。しかし、これより遅くなることは少なくない。受け手にとって重要なものをまず掲載する。たとえば、1980年の「ブラウダ」に、ハノイあてと北京あてのソ連の祝電が国家記念日に掲載されたが、モスクワあてのベトナム、中国からの祝電はそれぞれ、2日遅れ、3日遅れとなっている。
- (5) ここでの前提は祝電が5頁目ではなく1頁目に掲載されることは、そ

の祝電に与えられる高い優先順位を示している。ふつう、ソ連は自己の祝電ははじめの方の頁に掲載し、重要な送り手からの祝電も同様の扱いを受ける。たとえば、1950年の「プラウダ」では、ハノイあてのソ連の祝電は1頁目、北京あてのソ連の祝電は2頁目、モスクワあてのベトナムの祝電は2日遅れの4頁目、モスクワあての中国の祝電は3日遅れの4頁目に掲載されている。「ニャンザン」では、3国関係のほとんどの祝電は1頁目に掲載されている。

このようにみえてくると、これらの5つの指標は直接的、間接的に、友好度に関係しているようである。これらの5つの指標をもとにして、友好度をつくるために、因子分析を使い、バリマックス回転をした⁽⁶⁾。その第1次元は友好敵対の次元であり、文章の数、「親密な」、「尊敬する」という形容詞、あて名における個人名は第1次元において正の値を示し、送り手の日付と掲載の日付の違い、祝電の掲載された頁は負の値を示している。

3. 4国間の軍事力

友好度についてはすでに猪口(1981)で示したので、ここでは、軍事力の変化を概観しよう⁽⁷⁾。(図1と図2)

(1) VNTOTAL——ベトナム人民軍の将兵の数は20年間、着実に増加した。1964年には25万2千であったが、1980年には102万9千となった。1967年と1979年に大増加が起った。1965年からのベトナムにおける米国の急激な軍事増強にハノイの準備は立ち遅れ、1967年になってはじめて、非ゲリラ戦に重点を置いた戦略をもって米国に対抗しようとしたようである。そして、それは1968年のテト攻勢で頂点に達した。その後、軍事力の増強はやや停滞している。停戦協定の年、1973年、将兵の数はかなり上昇し、ハノイの最終的勝利の年、1975年には大増加をみている。解放後、将兵の増加は停滞し、戦後復興の難しさと

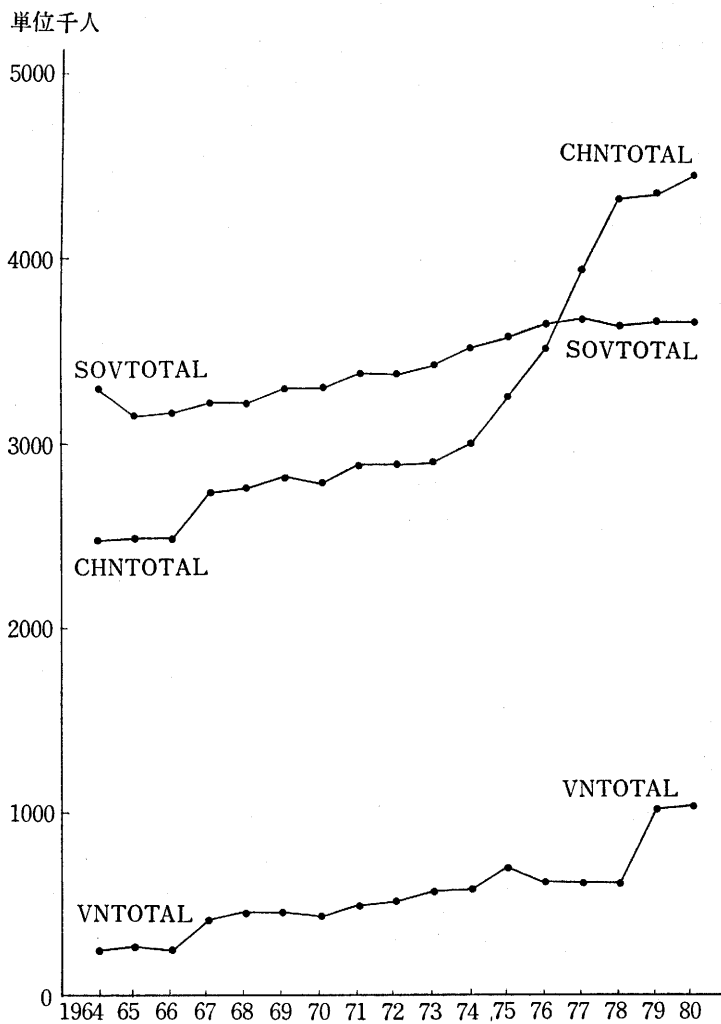


図1 ベトナム、中国、ソ連の将兵の数 (1)

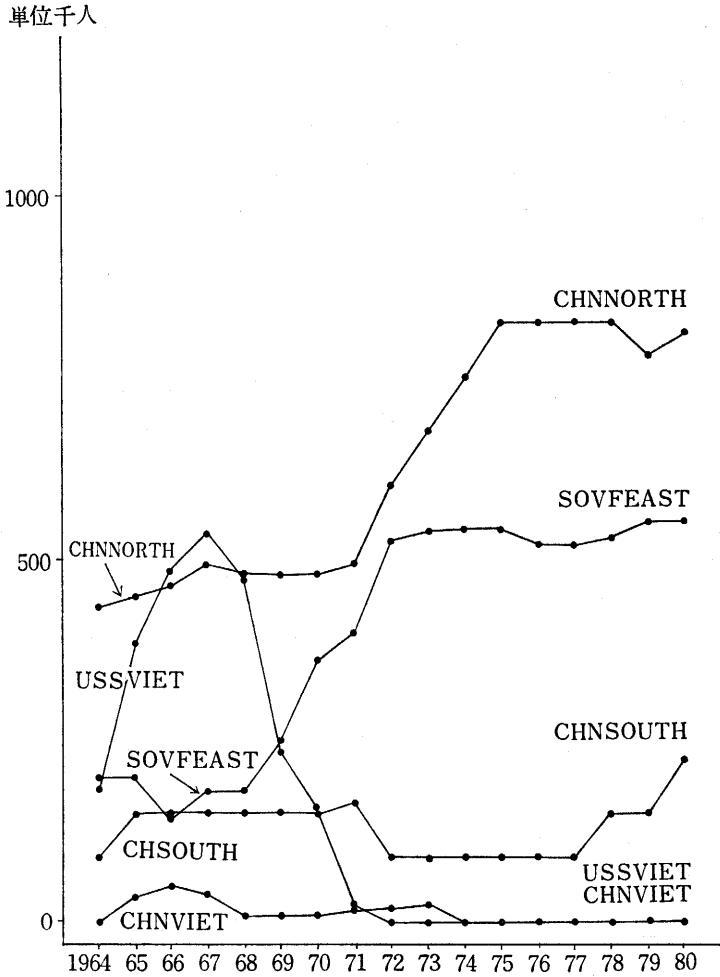


図2 ベトナム，中国，ソ連の将兵の数 (2)

非軍事目的のために人力を効率的に使うことの必要性を反映している。しかし、全方面で緊張が増し、1979年、中国はベトナムを「懲罰」するため進攻してきた。この年、ベトナムは将兵の数を大きく増加した。20年間に将兵の数は約4倍にもなった。

(2) CHNTOTAL——中国の将兵の数はゆるやかに増加した。1964年には247万6千であったが、次の10年間、250万から300万の間に留まった。米国(1964年—1973年)、ソ連(1969年—1982年)、ベトナム(1975年—現在)からくる脅威にもかかわらず、中国の将兵数はそれほど増加していない。1976年、「四人組」急進派が逮捕されてから、着実に増加しはじめた。しかし、中国の軍事支出はそう増加していないこと、又、武器取得は1970年代初頭からほとんど一定であることに注意しなければならない。軍事予算の緩慢な増加は中国の基本戦略を示している。ソ連の軍事的、技術的優勢が圧倒的である時、中国ができることはあまりない。戦車や戦闘機のための軍事支出を大規模に増加してみても、大した相違を生み出さない。高性能の武器を導入することは費用がかかりすぎる。そもそも、経済的困難は軍事目的に多くを費いやすことを許さない。したがって、中国のもっている最善の武器は膨大な人口と深い地勢であり、そのような要因は潜在的な侵略者に対して中国に侵略することを考え直させるであろうと計算しているのである。

(2a) CHNNORTH——中国の北方の将兵数は1964年の43万5千から、1980年の81万にまで増加している。大増加は1972年—1975年に集中している。基本戦略は軍事力に過度に依存しないことであるから、緩慢な増加は首肯できる。1970年代はじめの逸脱はソ連の脅威を誇張しながら、米国との親交関係を図っていた頃の中国上層部における派閥抗争に強く関係する要因によって説明されるのではないかと思われる。

(2b) CHNSOUTH——中国の南辺における将兵の数は南からの脅威にほぼ比例している。1964年には9万であったものが、ベトナムにおける米国の急速

な軍事増強に反応して1965年には15万に増加した。米国との親交回復の動きが大きくなされた1971年までほぼその水準に留まった。南の脅威は減退し、1964年の水準、8万9千に戻った。ソ連との友好相互援助条約締結によってベトナムの脅威が現実になった1978年まで、ほぼその水準を維持した。1978年と1979年には15万、1980年には20万となっている。1979年の作戦の時はこの数字をさらに上まわるものになっていた。

(2c) CHNVIET——ベトナムにおける中国の将兵や技師の数は1964年にはゼロであったが、1965年には3万5千に増加した。1966年には5万になり、その後、減少した。1967年—1970年には4万、1971年—1972年には1万8千、1973年にはやや増加し、1974年にはゼロになった。

(3) SOVTOTAL——ソ連の将兵の数は非常に緩慢にしか増加していない。1964年には330万で、1980年に356万8千である。ソ連軍は数よりも軍事の実効性の増大に興味をもっているようである。

(3a) SOVFEAST——極東とシベリアにおけるソ連将兵の数は1964年の20万4千から1980年の55万2千に増加した。中国が政治抗争に明け暮れた1966年—1968年には少し減少している。中国の挑発によるとされる軍事国境衝突の起った1969年に18万から25万2千へと大きく増加した。1970年にはさらに36万となり、1972年までに現在の52万8千にほぼ到達した。その後、数字はほぼ一定である。中国がベトナムに介入した1979年には、52万8千から55万2千に増加した。

(4) USSVIET——ベトナムにおける米国の将兵の数は1964年にゼロであったが、1968年まで年々着実に増加した。1965年には18万4千、1966年には38万5千、1967年には48万5千、1968年には53万6千となった。その後、減少しはじめ、1969年に47万5千、1970年に23万4千、1971年に15万6千、1972年に2万4千となっている。1968年のテト攻勢以来、米国は戦闘継続の意志を減退させていたのである。

このように、将兵の数は、該当する脅威によって引き起された軍事力の変化

についてはかなり正確な手懸りを与えることが明らかである。とりわけ、地域ごとにみた数字は脅威の認識の変化に敏感である。

4. 同盟関係の再編成

同盟関係の再編成についての因果関係をみつけるために、2種類の方程式がつくられる。ひとつは、4国の軍事力配置によって友好の表現を説明しようとするもので、もうひとつは、4国の友好の相互作用によって軍事力の水準を説明しようとするものである。左辺の従属変数は常にアクターの軍事力ないし友好度であり、右辺の独立変数はアクターの軍事力ないし友好度の全体的なパターンを表現する。これらの2種類の方程式はどのように、どのような要因によって、再編成がなされるかを理解するのを助けるものである。

4. 1. 友好度に影響を与える軍事力配置

3種類の独立変数がある。

- (a) 第4国の脅威——ベトナムにおける米国将兵の数。
- (b) 戦闘国における兄弟国の軍事的存在——ベトナムにおける、中国の将兵、技師の数。
- (c) 3国の各一対の間における軍事力の差——各一対の将兵の数の差。

これらの変数は右辺にくる。たとえば、VVC（ベトナムから中国への祝電にみられる越中関係についてのベトナムの友好度表現）は次のように規定されると定式化する。

$$VVC = a + b_1USSVIET + b_2CHNVIET + b_3DCV + b_4DCS$$

軍事力の差の変数は2つの形をとる。2国間の全軍事力の差 (DXYTOTAL) と国境における軍事力の差 (DXYBORDER) である。方程式全体と回帰係数

表1 友好度に影響を与える軍事力配置

式 \ 変数	a. USSVIET	b. CHINVIET	c. DCVTOTAL
1. VVC CVC	+	-	+
2. CCV VCV	+	+	+
3. VVC SVS	+	+	+
4. SSV VSV	-	+	+
5. CCS SCS	-	+	+
6. SSC CSC	-	+	+

式 \ 変数	d. DCVBORDER	e. DCSTOTAL	f. DCSBORDER
1. VVC CVC	+	-	-
2. CCV VCV	+	-	-
3. VVC SVS	+	+	+
4. SSV VSV	+	+	+
5. CCS SCS	+	-	-
6. SSC CSC	+	-	-

の予想される符号は表1に要約される。予想される符号についての因果的な意味づけについては付録3に要約される。

4. 2. 軍事力の水準の変化を引き起す友好度の相互作用

3種類の独立変数がある。

- (a) 第4国の友好度——ベトナムにおける米国の将兵の数。比較可能な時系列データの中で米国の友好度の指標として使えるものはないので、こ

れをもって代理の指標とする。

(b) 国家Aが第4国と戦争状態にある時、国家Bに対する国家Aの友好度の表現。

(c) 国家Aが第4国と戦争状態にある時、国家Aにおける国家Bの友好度の表現。

これらの3種類の独立変数は右辺にくる。たとえば、VNTOTAL は次のように定式化される。

$$\text{VNTOTAL} = a + b_1\text{USX} + b_2\text{VVC} + b_3\text{VVS} + b_4\text{CCV} + b_5\text{CCS} + b_6\text{SSV} + b_7\text{SSC}$$

方程式の全体と回帰係数の予想される符号は表2に示される。予想される符号についての因果的な意味づけは、付録4に要約されている。

表2 軍事力増強を引き起す認識上の相互作用

	a. USX	b. VVC	c. VVS	d. CCV	e. CCS	f. SSV	g. SSC
1. VNTOTAL	-	-	+	-		+	
2. CHNTOTAL	+	-		-	+		-
3. SOVTOTAL	-		+		-	-	-
4. CHNNORTH	-	-		-	+		-
5. CHNSOUTH	+	-		+	-		+
6. SOVFEAST	-		+		-	-	+
7. CHNVIET	+	+		+	-		

5. 結 果

5. 1. 軍事力の水準の変化を引き起す友好度の相互作用 (表3)

まず、方程式の基本統計量をみよう。57%以上の方程式は誤差項の中の自己相関に関する重大な問題はないようである。R²もかなり大きく、平均0.72であ

表3 軍事力増強を引き起す認識との相互作用

	R ² (\bar{R}^2)	D. W.	constant	USSVIET	VVC
VNTOTAL	0.78 (0.68)	1.70	557.75	-0.11 (0.19)	-141.06 (57.92)
CHNTOTAL	0.79 (0.70)	1.59	2865.57	0.05 (0.79)	-571.15 (162.38)
SOVTOTAL	0.80 (0.71)	0.74	3398.16	-0.82 (0.15)	
CHNNORTH	0.88 (0.83)	1.12	655.38	-0.28 (0.14)	-55.24 (29.43)
CHNSOUTH	0.50 (0.27)	1.61	84.43	0.09 (0.07)	-33.90 (14.58)
SOVFEAST	0.95 (0.93)	2.08	410.41	-0.76 (0.06)	
CHNVIET	0.36 (0.15)	1.28	0.77	0.03 (0.03)	1.81 (6.13)

	VVS	CCV	CCS	SSV	SSC
VNTOTAL	20.18 (90.43)	-687.80 (270.71)		120.71 (185.07)	
CHNTOTAL		-1885.34 (1451.17)	246.00 (379.58)		-719.51 (430.16)
SOVTOTAL	57.58 (71.77)		-158.97 (56.04)	-115.95 (150.82)	-13.05 (106.75)
CHNNORTH		-612.47 (263.06)	18.83 (68.81)		-94.25 (77.98)
CHNSOUTH		153.56 (130.35)	-28.72 (34.09)		10.25 (38.64)
SOVFEAST	34.39 (30.00)		-164.65 (23.42)	-84.75 (63.04)	37.94 (44.62)
CHNVIET		29.68 (53.06)	-3.17 (11.38)		

* 元の数字を10⁴倍してある。

る。回帰係数の中で最も目立つのは SOVTOTAL の方程式と SOVFEAST の方程式の USSVIET の負の符号である。つまり、ベトナムにおける米国の強い存在はソ連の軍事増強に対する自己抑制を意味する。同様に、VNTOTAL、

CHNTOTAL, CHNNORTH, の方程式にみられる VVC と CCV の負の符号が目立つ。越中関係における敵意の表現は急速に軍事力の水準に反映されることを示唆するようである。

ベトナムと中国の間には相互作用が対称的である。ベトナムとソ連の間には、相互性は強くない。その上、ソ連に対するベトナムの友好の表現はこれら2国の軍事力増強を意味する傾向があるが、ベトナムに対するソ連の友好の表現はソ連における軍事力の増強とは関係ないようである。

中国とソ連の間では、軍事力の水準は敵対者の友好の表現によって負の方向に影響を受ける。いかえると、SOVTOTAL と SOVFEAST は CCS が下がれば増加し、CHNTOTAL と CHNNORTH は SSC が下がると増加する。

5. 2. 友好度に影響を与える軍事力配置 (表 4-1, 4-2, 4-3)

まず基本統計量。方程式の70%は誤差項に自己相関の深刻な問題はないことを示しているようである。R²は越中関係については平均0.64, 越ソ関係については0.42, 中ソ関係については0.33である。回帰係数の中で、首尾一貫して強い影響を友好度を与えているのはUSSVIETである。USSVIETはVVC, VVS, CCVに正の影響を与え、SSV, CCS, SSCに負の影響を与える。SSVとVVSの非対称性は興味深い。これはベトナムで米国が攻撃的になった時に、ソ連が自己抑制をしているらしいことを示しているようである。CHNVIETの影響が最も強いのはSSVに対してである。ベトナムをめぐる中ソ対決競争をCHNVIETは際立たせたようである。

中国とベトナムの軍事力の差が中国に有利な時には越中関係に正の影響を与える。又、中国とソ連の軍事力の差が中国に有利な時は、中ソ関係に負の影響を与える。挑戦者(それぞれ、ベトナムと中国)の軍事力の増加は不安にさせる要因となり、負の相互作用を始動させる傾向にある。

中国とソ連の軍事力の差が中国に有利な時は、越中関係に負の影響を与え

表 4-1 友好度に影響を与える軍事力配置

	R ² (\bar{R}^2)	D. W.	constant	USSVIET	CHNViet	DCV. TOTAL	DCS. TOTAL	DCV. BORDER	DCS. BORDER
VVC	0.70 (0.60)	1.95	-39820.3	13.9 (8.1)	-41.4 (103.0)	12.8 (11.6)	-22.2 (10.5)		
VVC	0.73 (0.64)	1.99	19895.9	11.4 (8.0)	-100.3 (100.6)			26.2 (7.6)	-34.8 (15.4)
CVC	0.71 (0.61)	2.38	4798.5	10.3 (8.4)	-237.8 (106.7)	-1.9 (12.0)	-12.6 (10.9)		
CVC	0.56 (0.41)	1.67	22030.9	14.3 (10.8)	-228.2 (134.8)			24.3 (10.2)	-41.9 (20.6)
CCV	0.42 (0.22)	0.81	3741.3	1.2 (2.0)	3.4 (25.7)	1.5 (2.9)	-2.9 (2.6)		
CCV	0.62 (0.49)	1.52	3780.7	-0.6 (1.7)	-13.2 (21.2)			6.0 (1.6)	0.6 (3.3)
VCV	0.74 (0.65)	2.83	-22051.0	-17.4 (8.4)	100.4 (107.4)	5.3 (12.1)	-19.6 (10.9)		
VCV	0.64 (0.52)	2.75	18226.7	-18.6 (10.4)	72.2 (130.1)			31.9 (9.8)	-32.6 (19.9)

* 元の数字を10⁴倍してある。

表4-2 友好度に影響を与える軍事力配置

	R ² (R̄ ²)	D. W.	constant	USSVIET	CHNVIET	DCV. TOTAL	DCS- TOTAL	DCV. BORDER	DCS- BORDER
VVS	0.44 (0.25)	2.36	-36778.6	13.9 (6.2)	83.3 (78.9)	14.7 (8.9)	-9.8 (8.0)		
VVS	0.24 (-0.01)	1.98	6480.7	7.3 (7.5)	5.0 (93.6)			3.6 (7.1)	5.0 (14.3)
SVS	0.53 (0.37)	2.56	-46692.2	14.0 (4.9)	42.4 (62.6)	18.7 (7.0)	-15.0 (6.4)		
SVS	0.37 (0.16)	2.24	7128.5	5.1 (5.9)	-22.0 (74.2)			5.6 (5.6)	15.7 (11.4)
SSV	0.45 (0.27)	2.49	20413.0	-2.6 (2.6)	79.3 (33.1)	-4.7 (3.7)	-5.9 (3.4)		
SSV	0.37 (0.16)	2.45	3761.9	-1.0 (2.9)	92.0 (36.3)			-4.8 (2.7)	2.0 (5.6)
VSV	0.50 (0.33)	2.03	79593.6	-30.3 (9.9)	248.3 (126.6)	-26.9 (14.3)	23.3 (12.9)		
VSV	0.47 (0.29)	2.12	7984.7	-19.0 (10.6)	273.2 (133.3)			-2.4 (10.0)	-33.6 (20.4)

* 元の数字を10⁴倍してある。

表 4—3 友好度に影響を与える軍事力配置

	R ² (\bar{R}^2)	D.W.	constant	USSVIET	CHNVIET	DCV. TOTAL	DCS. TOTAL	DCV. BORDER	DCS. BORDER
CCS	0.30 (0.07)	0.64	-33639.3	-8.5 (9.4)	-14.2 (119.8)	7.9 (13.5)	-13.6 (12.2)		
CCS	0.58 (0.44)	1.57	2494.2	-18.4 (7.6)	-93.8 (95.1)			28.1 (7.2)	9.4 (14.6)
SCS	0.29 (0.06)	0.60	-34071.9	-8.3 (10.0)	-26.3 (127.9)	8.5 (14.4)	-14.6 (13.0)		
SCS	0.58 (0.44)	1.53	4709.8	-19.0 (8.1)	-111.7 (101.4)			30.0 (7.6)	10.0 (15.5)
SSC	0.19 (-0.08)	2.37	-11965.8	-3.6 (5.1)	88.6 (65.7)	-0.3 (7.4)	-0.3 (6.7)		
SSC	0.24 (-0.01)	2.78	-11753.2	-5.7 (5.2)	76.9 (64.8)			4.3 (4.9)	6.0 (9.9)
CSC	0.18 (-0.09)	2.10	-12922.4	-4.9 (5.1)	73.3 (65.7)	0.4 (7.4)	-1.5 (6.7)		
CSC	0.29 (0.05)	2.65	-9281.2	-7.6 (5.0)	53.0 (62.8)			6.9 (4.7)	5.3 (9.6)

* 元の数字を10⁴倍してある。

る。中越の軍事力の差が中国に有利な時には、中ソ関係に正の影響を与える。これらは越中国境と中ソ国境の戦略的不可分性を示している。

中国とベトナムの軍事力の差が前者に有利な時は、越ソ関係に正の影響をもつ。中越の友好関係とソ越の友好関係は中国とベトナムが競分的なパターンを示さない限りは両立する。

中国とソ連の軍事力の差が中国に有利な時には、越ソ関係は正の影響をもつ。いいかえると、ソ連に対して中国が競争的な立場にあることは、越ソ関係の友好関係を意味する。

6. 討 論 と 結 論

以上、要約された結果は基本的に満足のいくものであった。越中ソ間の同盟関係の変化についての専門家の意見に大方一致しているといえる。その上、「予測」のための潜在可能性をも示唆した。予測とはここでは、関心の対象となっているもののなんらかの変化を预示する傾向のある手懸りを同定することである。たとえば、友好の表現がお互いの軍事力の水準における変化に先立つものであるならば、さまざまな政治外交的言明の体系的編集と分析は非常に有用なものであろう。もし、挑戦者がますます競争的である時に、世界がよりダイナミックになり、認識の上での相互作用もそれに伴い、変化するならば、より大きな興味をもって、軍事力の水準の変化を観察できるであろう。しかしながら、このようなやり方には、2つの問題がある。第1に、正確さは必ずしも確約できない。軍事データはその信頼性の不足で知られているし、友好度を正確に解説、測定することは容易ではない。決定的な解決はない。しかし、第3節で示したように、私が使った指標は軍事力と認識の基本変化をよくつかまえているのである。私の使ったデータには一定の限界があるので、実用のためには、より包括的で、やや感度の高いデータが必要とされる。

第2に、方程式における因果関係の時間の変化は1年である。遅れのついた項はない。時間単位として1年を選んだことは便宜的なものである。軍事力のデータは1年単位で、国家記念日は、1年に1回しかない。遅れのついた項をいれたり、1年より短い単位で使ったら、より有効になったかもしれない。しかし、そうすると今度は、データの利用可能性や信頼性の問題が増大する。

暫定的ながら結論づけると、ここで試みられた分析方法は、同盟変化についてのより深い調査を得るために、さらに発展させる価値のあるものである。小論は同盟の力学をモデル化する出発点にすぎない。同盟関係を短期間ではあれ保持してきた越中ソ関係にみられる同盟関係の再編成と武力紛争の発生は同盟関係が、(1)安全保障を強化する、(2)さもなくば避けられるであろう紛争にまきこまれる、(3)同盟国によって攻撃される、という3つの可能性のうちの最後の可能性を示す例としてあげることができる。実際、戦争についての最近のすぐれた研究によると、同盟国間の戦争はそうでないペア間の戦争よりも3倍の確率⁽⁸⁾をもっているという。同盟者はどのようにして敵対者になるのであろうか。一層の研究が必要とされる所以である。

付録1 将兵の数

「軍事バランス」がこの情報のための第一義的資料である。地域的な区分は全体の数字よりも推測を多く含む。「軍事バランス」にないデータについては、その年の近辺の年の傾向にもとづいて推定した。より推測的な側面については、西原 正教授（防衛大学校）のアドバイスから多くを学んだ。

付録2 国家記念日の祝電

国家記念日、9月2日、10月1日、11月7日に、ベトナム、中国、ソ連の間で交換される祝電がデータベースである。ふたつだけ例外がある。1969年、ベトナムに対して中国とソ連が送り、9月2日、『ニャンサン』に掲載されたも

のは祝電ではなく、ホーチミンの死に対する弔電である。VCV, VSV, CCV, CCS, CVC, CSC, SCS のシリーズについてみあたらないものについては、次の方法で推測した。

- (1) 該当年の近辺の傾向にもとづいて外そうする。
- (2) 国家記念日ではあるが、別な機関紙に掲載された場合、該当年の近辺の傾向にもとづいて、比例推定した。たとえば、VCV から CCV を推定した。

付録3 友好度に影響を与える軍事力配置

- 1a) VVC と CVC—USSVIET。米国が大きな脅威を与えれば与えるほど、ベトナムは中国に対して友好的である。
- 2a) CCV と VCV—USSVIET。米国が大きな脅威を与えれば与えるほど、中国はベトナムに対して友好的である。
- 3a) VVS と SVS—USSVIET。米国が大きな脅威を与えれば与えるほど、ベトナムはソ連に対して友好的である。
- 4a) SSV と VSV—USSVIET。米国が大きな脅威を与えれば与えるほど、ソ連はベトナムに対して友好的でなくなる。なぜなら、ソ連と米国との間の地球大の平和はベトナムでの直接的な対決によってあやうくされるかもしれないから。
- 5a) CCS と SCS—USSVIET。米国が大きな脅威を与えれば与えるほど、中国はソ連に対して友好的でなくなる。なぜなら、米国の攻撃性は中ソ間の対米政策の違いをかえって露呈する結果になるから。
- 6a) SSC と CSC—USSVIET。米国がより大きな脅威を与えれば与えるほど、ソ連は中国に対して友好的でなくなる。なぜなら、米国の攻撃性は中ソ間の対米政策の違いをより露呈するだけであるから。

- 1b) VVC と CVC—CHNVIET。ベトナムに中国将兵が多ければ多いほど、ベトナムは中国に対して友好的である。なぜなら、越中関係の悪化を抑止する要因のひとつであるから。
 - 2b) CCV と VCV—CNNVIET。ベトナムに中国将兵が多ければ多いほど、中国はベトナムに対して友好的である。
 - 3b) VVS と SVS—CNNVIET。ベトナムに中国将兵が多ければ多いほど、ベトナムはソ連に対して友好的である。
 - 4b) SSV と VSV—CHNVIET。ベトナムに中国将兵が多ければ多いほど、中国はソ連に対して友好的である。
 - 6b) SSC と CSC—CHNVIET。ベトナムに中国将兵が多ければ多いほど、ソ連は中国に対して友好的である。
-
- 1cd) VVC と CVC—DCVTOTAL と DCVBORDER。軍事力水準で中国がベトナムに対して圧倒的であればあるほど、ベトナムは中国に対して友好的である。
 - 2cd) CCV と VCV—DCVTOTAL と DCVBORDER。軍事力水準で中国がベトナムに対して圧倒的であればあるほど、中国はベトナムに対して友好的である。
 - 3cd) VVS と SVS—DCVTOTAL と DCVBORDER。中国がベトナムに対して大きな脅威を与えれば与えるほど、ベトナムはソ連に対して友好的である。
 - 4cd) SSV と VSV—DCVTOTAL と DCVBORDER。中国がベトナムに対して大きな脅威を与えれば与えるほど、ソ連はベトナムに対して友好的である。
 - 5cd) CCS と SCS—DCVTOTAL と DCVBORDER。中国がベトナムに対して圧倒的であればあるほど、中国はソ連に対して友好的である。なぜ

なら、中国は裏口でより自信をもっていることになるから。

6cd) SSC と CSC—DCVTOTAL と DCVBORDER。中国がベトナムに対して圧倒的であればあるほど、ソ連は中国に対して友好的である。

1ef) VVC と CVC—DCSTOTAL と DCSBORDER。中ソ間の力の差があまりないと、いいかえると、中国がソ連に対して大きな脅威を与えれば与えるほど、ベトナムは中国に対して友好的でない。なぜなら、そのような状況においては、ベトナムはソ連に対してより友好的であるから。

2ef) CCV と VCV—DCSTOTAL と DCSBORDER。中ソ間の力の差があまりないと、いいかえると、中国がソ連に対して大きな脅威を与えれば与えるほど、中国はソ連に対して友好的でない。

3ef) VVS と SVS—DCSTOTAL と DCSBORDER。中国がソ連に対して大きな脅威を与えれば与えるほど、ベトナムはソ連に対して友好的である。

4ef) SSV と VSV—DCSTOTAL と DCSBORDER。中国がソ連に対して大きな脅威を与えれば与えるほど、ソ連はベトナムに対して友好的である。

5ef) CCS と SCS—DCSTOTAL と DCSBORDER。中国がソ連に対して、軍事力水準で競争的であればあるほど、中国はソ連に対して友好的でない。

6ef) SSC と CSC—DCSTOTAL と DCSBORDER。中国がソ連に対して、軍事力水準で競争的であればあるほど、ソ連は中国に対して友好的でない。

付録 4 軍事力増強を引き起させる認識上の相互作用

1a) VNTOTAL—USX。ベトナムにおける米国の脅威が小さければ小さ

いほど、ベトナム軍は大きくなる。なぜなら、米国の軍事的存在はベトナム将兵の数の増加を効果的に抑えるから。

2a) CHNTOTAL—USX。米国がベトナムに対して非友好的であればあるほど、ベトナムにおける中国将兵の数は大きい。

3a) SOVTOTAL—USX。ベトナムにおいて、米国が非友好的であればあるほど、地球大の対決を避けるために、ソ連軍の増強は抑えられる。

4a) CHNNORTH—USX。ベトナムにおいて、米国が非友好的であればあるほど、北辺の中国将兵の数は小さい。なぜなら、南辺での兵力増強が必要であるから。

5a) CHNSOUTH—USX。ベトナムにおいて、米国が非友好的であればあるほど、南辺での中国将兵の数は大きい。

6a) SOVFEAST—USX。ベトナムにおいて、米国が非友好的であればあるほど、ソ連極東での将兵の数は小さい。なぜなら、中国の関心は南にいくから。

7a) CHNVIET—USX。ベトナムにおいて、米国が非友好的であればあるほど、ベトナムにおける中国将兵の後は大きい。

1b) VNTOTAL—VVC。ベトナムが中国に対して友好的であればあるほど、ベトナム将兵の数は小さい。

2b) CHNTOTAL—VVC。ベトナムが中国に対して友好的であればあるほど、中国将兵の数は小さい。

3b) CHNNORTH—VVC。ベトナムが中国に対して友好的であればあるほど、北辺と南辺の戦略的不可分性のために、北辺での中国将兵の数は小さい。

4b) CHNSOUTH—VVC。ベトナムが中国に対して友好的であればあるほど、南辺の中国将兵の数は小さい。

- 7b) CHNVIET—VVC。ベトナムが中国に対して友好的であればあるほど、ベトナムにおける中国将兵の数は大きい。
- 1c) VNTOTAL—VVS。ベトナムがソ連に対して友好的であればあるほど、ベトナム軍はソ連によって強化されることが容易になる。
- 3c) SOVTOTAL—VVS。ベトナムがソ連に対して友好的であればあるほど、ソ連軍は大きい。なぜなら、ソ連は帝国主義に対してより戦闘的な姿勢をとることを期待されるから。
- 6c) SOVFEAST—VVS。ベトナムがソ連に対して友好的であればあるほど、極東においてソ連将兵の数は大きいだろう。なぜなら、帝国主義に対してより戦闘的な立場をとることをソ連が期待されるから。
- 1d) VNTOTAL—CCVX。中国がベトナムに対して友好的であればあるほど、ベトナム将兵の数は小さい。
- 2d) CHNTOTAL—CCVX。中国がベトナムに対して友好的であればあるほど、中国将兵の数は小さい。
- 4d) CHNNORTH—CCVX。中国がベトナムに対して友好的であればあるほど、2つの戦略的に不可分な国境が静かであるから、北辺の中国将兵の数は小さい。
- 5d) CHNSOUTH—CCVX。中国がベトナムに対して友好的であればあるほど、南辺の中国将兵の数はベトナムにおける米国将兵に対抗して増加する。
- 7d) CHNVIET—CCVX。中国がベトナムに対して友好的であればあるほど、ベトナムにおける中国将兵の数は大きい。
- 2e) CHNTOTAL—CCSX。中国がソ連に対して友好的であればあるほ

- ど、ソ連の援助で中国軍を強化する機会が多くなる。
- 3e) SOVTOTAL—CCSX。中国がソ連に対して、友好的であればあるほど、ソ連軍は小さい。なぜなら、ソ連が中国に脅威を感じないから。
- 4e) CHNNORTH—CCSX。中国がソ連に対して友好的であればあるほど、北辺の中国将兵の数は大きい。なぜなら、ソ連の援助で中国軍を強化する機会が多いから。
- 5e) CHNSOUTH—CCSX。中国がソ連に対して友好的であればあるほど、南辺での中国将兵の数は小さい。2つの戦略的に不可分な国境は静かであるから。
- 6e) SOVFEAST—CCSX。中国がソ連に対して友好的であればあるほど、極東でのソ連の将兵の数は小さい。
- 7e) CHNVIET—CCSX。中国がソ連に対して友好的であればあるほど、ベトナムにおける中国将兵の数は小さい。なぜなら、中ソは仲が悪い時にはベトナムに対する兄弟的援助を競うから。
- 1f) VNTOTAL—SSV。ソ連がベトナムに対して友好的であればあるほど、ベトナムの将兵の数は大きい。なぜなら、ソ連の援助はベトナム軍の成長を促すから。
- 3f) SOVTOTAL—SSV。ソ連がベトナムに対して友好的であればあるほど、ソ連軍の成長はゆるやかである。なぜなら、全体的な状況がソ連にとってより緊迫したものでないことを示しているから。
- 6f) SOVFEAST—SSV。ソ連がベトナムに対して友好的であればあるほど、極東におけるソ連軍の成長はゆるやかである。なぜなら、全体的な状況がソ連にとって緊迫したものでないことを示しているから。
- 2g) CHNTOTAL—SSC。ソ連が中国に対して友好的であればあるほど、

中国将兵の数は小さい。

- 3g) SOVTOTAL—SSC。ソ連が中国に対して友好的であればあるほど、ソ連将兵の数は小さい。
- 4g) CHNNORTH—SSC。ソ連が中国に対して友好的であればあるほど、北辺での中国将兵の数は小さい。
- 5g) CHNSOUTH—SSC。ソ連が中国に対して友好的であればあるほど、南辺での中国の将兵の数は大きい。
- 6g) SOVFEAST—SSC。ソ連が中国に対して友好的であればあるほど、極東でのソ連の将兵の数は小さい。

- 1 代表的なものとして次を参照。William S. Turley, ed., *Vietnamese Communism in Comparative Perspective*, Boulder, Colorado : Westview Press, 1980 ; Richard Wich, *Sino-Soviet Crisis Politics*, Cambridge, Mass : Harvard University Press, 1980 ; Herbert J. Ellison, ed., *The Sino-Soviet Conflict : A Global Perspective*, Seattle, Washington : University of Washington Press, 1982 ; Donald S. Zagoria, ed., *Soviet Policy in East Asia*, New Haven, Connecticut : Yale University Press, 1982 ; David W. P. Elliott, ed., *The Third Indochina Conflict*, Boulder, Colorado : Westview Press, 1981 ; Gareth Porter, *A Peace Denied : The United States, Vietnam, and the Paris Agreement*, Indiana : Indiana University Press 1976。
- 2 猪口孝「越中ソ関係, 1964年—1980年——探索的分析」『東京大学東洋文化研究所紀要』第87冊, 1981年11月, 197—224頁。
- 3 International Institute for Strategic Studies, *The Military Balance, 1980—1981*, London : IISS, 1982。
- 4 このような特性のもつ意味についてはたとえば次を参照。William E. Griffith, “Communist Esoteric Communications : *Explication de Texte*,” in Ithiel de Sola Pool et al, eds., *Handbook on Communication*, Chicago : Rand McNally, 1973, pp 512-520, Takashi Inoguchi, “Measuring Friendship and Hostility among Communist Powers : Unobtrusive Measures of Esoteric Communication,” *Social Science Research*, Vol.1, No 1 (April 1972), pp. 79-105。

- 5 祝電のテキストは次を参照。 *Foreign Broadcasting Information Service Daily Report —People's Republic of China*, November 7, 1974, p. A-1。
- 6 猪口「前掲論文」, 215頁。
- 7 IISS, *op. cit.*
- 8 Bruce Bueno de Mesquita, *The War Trap*, New Haven, Connecticut : Yale University Press, 1981, pp. 159-164。